

年間第十五主日

2012.7.15

マルコ 6・7-13

今日のミサの中で私たちは、十二人の弟子たちを使徒として派遣されるイエスのみことばを聴きました。今日の福音のこれらのみことばを私たちはどのように受け止めたらよいのでしょうか。

福音書の中には、直接に私たちの心に響いて来る、今の自分に語りかけて来ると思えるようなみことばを数多く見出すことが出来ます。けれども、今日の福音のみことばは、それを直接に私たちに語りかけるみことばとして受け止めようとする、私たちに戸惑いを感じさせるようなみことばではないでしょうか。私たちはカトリック信者として、自分の信仰は自分のためだけのものではなく、自分が信じていることを周りの人々にも伝えてゆくように教えられてきました。私たちもある意味で遣わされた者たちとして、もっとも自分の信仰を周りの人たちに伝えてゆかなければと思っています。けれども、そう思えば思うほど、そのようなことの難しさに直面し、そのように出来ていない自分自身に負い目を感じてしまいます。

今日もミサの中に響く福音のみことばが、そのように私たちを気落ちさせ、萎縮させてしまうとするなら、それは多分、私たちがあまりにも性急に福音のみことばを自分たちが実行に移すべき課題として受け止めてしまっているからかもしれません。私たちの生真面目な性急さが生み出すそのような息苦しきから解放されるために必要なことは、ひとまず福音書が語ろうとしていることを語られているままに受け止めるということであるかもしれません。

今日私たちが聴いた福音は、マルコ福音書に語られている、弟子たちを派遣するイエスのみことばです。弟子たちの派遣とその際イエスが弟子たちに語られたみことばは、マタイ福音書にもルカ福音書にも見出すことが出来ます。けれども、それぞれの福音書の前後関係を比べてみると、マルコ福音書だけが今日の福音の箇所直前に、先週の日曜日に私たちが聴いた、ナザレの出来事を語っていることに気付きます。ご自分の故郷であるナザレの人々に受け入れられることのなかったイエスは、そのような苦い経験にもかかわらず、ナザレを後にして、付近の村々を巡り歩いて、神の国の福音を宣べ伝えていかれます。その道の途上で、イエスは今日の福音に語られているように、弟子たちを派遣されるのです。この一連の出来事のうちに、マルコ福音書がここで弟子たちの派遣を語ることによって、私たち伝えようとしているメッセージが込められて

いるように思えないでしょうか。

「あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとしないうところがあったら、そこを出てゆくとき、彼らのへの証として足の裏の埃を払い落とさない。」という今日の福音の弟子たちに向けて語られたイエスのみことばは、それに先立って語られている、ご自分の故郷であるナザレでイエスご自身が経験されたとおりのことが弟子たちの行く手にも待ち受けていることを告げているように思えます。そのような手痛い挫折にも関わらず、神の国の福音を宣べ伝えるイエスの進み行かれる道は閉ざされることがありません。むしろ、そのようにして進み行かれる御自分の道に、イエスは弟子たちを招き入れようとしておられるのです。今日の福音に語られていることを通して、神が御子イエスを遣わすことによって、この世界にもたらそうとしておられる神の国の福音は、より多くの人々の中に拡がってゆくことになるのです。ここに、マルコ福音書が先週の日曜日と今日の日曜日にわたって、私たちに語りようとしているメッセージの中心があるように思えるのです。

福音書の中心を貫いて語られているイエスとその弟子たちの物語の全体は、イエスの直弟子たちによって教会の中で語られた遠い日の思い出を語っているように思えないでしょうか。イエスと弟子たちの最初の出会いを語るガリラヤ湖の場面も、収税所に座っていたレビにイエスが声をかけてくださった場面も、私たちには不思議に思えます。「あなたがたを人間をとる漁師にしよう。」とイエスに言われただけで、どうしてガリラヤ湖の漁師であった最初の弟子たちはイエスの後について行くことになったのでしょうか。徴税人であったレビは、「わたしに従いなさい」と呼びかけられたとき、何故すぐにイエスに従うことで来たのでしょうか。これらの物語は福音書の作者によって後から生み出された物語とは思えません。何故なら、少なくともガリラヤ湖の漁師であった最初の弟子たちは、福音書が書かれた時代の教会においては、イエスの直弟子たちとして教会において中心的役割りを果たす指導者たちとなっていたからです。これらの、イエスとその弟子たちの出会いの物語は、イエスの直弟子たちの遠い日の思い出として語られることによって、いわば理想化されて、イエスとその後に従う者たちとの本質的な関係を語る物語となったのです。すなわち、イエスとイエスを信じる者たちの関係は、一方的にイエスによって開かれるものであることを語る、教会に受け継がれてきた信仰の本質を語る物語となったのです。

今日の福音に先立ってマルコ福音書の3章に語られている十二人の弟子たちの選びの出来事も同じことを語っています。十二人の弟子たちを選び出して、彼らに使徒という名称を与えられたのも、神への祈りの中で下されたイエスの

一方的なイニシアチブによることであつたのです。

イエスによって弟子たちに与えられた使徒という名称は、もっと普通のことばで言えば使者ということです。今日の福音の弟子たちは、イエスの使者としてイエスによって派遣されて行くのです。使者の務めは、自分たちを派遣した方から託されたメッセージを忠実に伝えるということです。使者の権威は、彼らを派遣した方の権威にかかっているのです。派遣された使者のメッセージを受け入れる者たちは、使者を派遣した方のメッセージを受け入れるのです。イエスが今日の福音の場面で弟子たちを派遣することによって、弟子たちに託されているメッセージは言うまでもなく神の国の福音のメッセージです。そしてそれは、イエスご自身が神から遣わされた者として、私たちの世界に伝えようとされておられる神からのメッセージです。

今日の福音でイエスが派遣されて行く弟子たちに求めておられることは、神から遣わされた者としての御自分の生き方に見習うとすることです。イエスの使徒とされた者たちは、託されたメッセージを忠実に伝えるだけではなく、自分たちを遣わされたイエスの神の使者としての生き方に従って生きるように求められているのです。そのために弟子たちは「人の子には枕するところもない」と言われたイエスの十字架に至る旅路につき従って、神から遣わされたイエスの使者としての生き方を学ぶことになったのです。

私たちが教会と出会い、カトリック信者となることが出来たのは、元をたせば、今日の福音に語られているイエスの弟子たちの派遣に源を発しているのです。十字架の死を越えて、復活されたイエスが弟子たちを全世界に向けて派遣して下さったことによって、私たちがその中でカトリック信者となった教会は誕生したのです。今日のイエスの派遣のみことばを自分に向けられたみことばとして受け止め、それに自分の生涯を捧げた人々の、最初の弟子たちから始まり教会の中で綿々として受け継がれてきた、イエスの使者として生きた人々の苦闘の使徒職のおかげで、イエスがもたらされた神の国の福音は私たちのもとにまで届けられたのです。

今日のミサの中で、私たちにカトリック信者としての信仰をもたらしてくれたキリストの使徒とされた人々の生涯を偲び、そのようにして私たちを信仰の恵みに招いてくださった、神の恵みの重さをあらためて味わいたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高